

音声学から考える商標の称呼の類否 総整理第4回

弁理士 池山拓治

0. はじめに

このコラムも終わりに近づいてきました。今回から最終回まで、これまでの総整理をします。おいしいところだけをつまみ食いすることができますので、マニアさんたちも、それほどでもない方もお付き合いください。

1. 復習

今回の復習は、音韻体系についてですが、単なる復習ではなく、以前は触れなかった内容も付加し、マニアさんではない方もお付き合いくださいと冒頭を書いておきながら、ややマニア寄りの内容になっている自己矛盾が生じています。お許しください。

2. 母音の識別順と喪失順

一般的な日本人は/r/や/l/の音の違いを認識することが難しいといわれます。聴くことと、自身で発音することを繰り返して、身につけましょうと学生時代に指導されるものです。

しかし、日本語の音韻体系の獲得前の乳児期には、日本語の音韻体系にはない音も識別できていたのが、その後の乳児期から幼児期の音韻体系を獲得する過程において、必要のない音の識別能力を喪失するということが脳波の解析からわかっています。ですから、最初はあったものを後に喪失し、それをよみがえらせるよう学生時代に努力するというのがより正確な説明です。脳が最も発達する時期に、音の違いを意味の区別と結びつける言語体系を形成させながら、喪失も進みます。

その際に獲得する音韻の識別能力の順序は異なる言語間でもほぼ一致することが知られています。音韻の獲得過程が共通することから、世界の言語の音韻体系は音素の無秩序な組み合わせによるものではないといえます。

言語を問わず、母音は

「あ」

「あ い」

「あ い う」

「あ い う え」

「あ い う え お」

の順で識別能力を獲得します。日本語の母音の「あいうえお」の順はサンスクリット語に倣ったものという説が有力ですが、その順序で獲得します。母音が2つ以下という言語の存在は今のところは知られていませんから、世界のどの言語も最低3つの母音を有するといわれます。最低の母音数である3母音体系の言語の例としては、アラビア語が最も有名で、日本では琉球方言の一部にみられます。

「え」や「お」は「あ い う」の3母音の獲得後に識別能力を獲得します。新潟県や岡山県の一部では/o/と/o/の2種類の「お」を使い分けますが、その識別能力は5母音を識別できるようになった後と考えられます。日本語にはありませんが、[ö]や[i]は「あいうえお」の5母音の獲得後に、鼻母音は口母音の獲得後に識別できるようになります。

音素の獲得には一定の順序があるので、逆に言えば、ある言語において、ある音素が認められれば、それより前に獲得される音素が存在していることを示していることとなります。[i]が存在していれば、口母音を有するといえ、「お」が存在していれば、それより前に獲得されているはずの「あいうえ」が存在する5母音

の言語であるという含意法則が成立します。

また、失語症の場合は、喪失する順序は獲得した順と逆の過程をたどりますから、後に獲得した音から喪失し、最初に獲得した音は最後まで残ります。

つまり、「あいうえお」の順はより根本的で識別容易である順であると考えられるのです。

以上